

明大マンドリン倶楽部の演奏会を聞きに行った。小田原での演奏会は六十三回目になるそうだ。コロナで三年ほど途絶えていたが、ようやく再開にこぎつけ学生も聴衆も喜びにあふれていた。

わたしがこの演奏会に行く様になったきっかけは、御近所の小田高十三期の明大出身木村茂久さんから誘われたのが最初である。木村さんは小田高野球部でピッチャーをやっていた百八十七センチ近い大男でゴルフと酒を愛して止まなかった。しかし、二十十七年八月にわずか三週間病んで亡くなった。

- 詰め襟の学生がひくマンドリン時にか細くときには強く

男子学生は黒の詰め襟を着ている。女子は同じく黒のスーツを着ている。そのなかに一人ネクタイを締めベージュのジャケットを着た男性がいた。聴くところによると卒業生が応援で参加しているのだそうだ。部員の数が足りなくなっているらしい。

- すすり泣くマンドリンの音今宵また影を慕いて創部百年

大正十二年創部以来百年間宮々として続いてきたそうで、これからも是非続いてほしいと思う。古賀政男作曲の「影を慕いて」は、マンドリンの音色にまさにぴったりな楽曲である。

- 贈呈の花束離さず幼娘は客席見渡しニ「リ」一礼

第二部が終わったところで、花束贈呈の段取りになり、小学生の男子と四歳の幼娘が花束を抱えて正面に進んできた。男子はめでたく花束を指揮者に渡したのだが、幼娘は花束を離そうとしない。

受け取るはずの大男の副将は、かがみこんで花束を離すよう懇願するのだが、首を振ってことわると、幼娘は客先を見渡し深深と一礼した。客席からはどっと歓声が沸いた。

- ピックの手はやく激しく掻き鳴らす弦は切れたりコンサートマスター

第三部になり演目は「マンドリンで奏でる世界の名曲」になった。学生たちは全員白のジャケットに着替え、一層力強く演奏を始めた。その時にこの事件が起こったのである。コンサートマスターは独奏の場面が多く見ている側はハツとした。

● マスターは咄嗟にうしろ振り返り楽器交換演奏続く

うしろ席の学生は自分の楽器を素早く渡し、マスターは何事も無かったかのように悠々と演奏を続けた。驚いたことにうしろの学生はジャケットのポケットから予備の弦を取りだし、張替えて調弦していた。このような事故は多分しょっちゅう有るのだろう。

● いま一度戻れるものなら戻りたい輝く青春のあの頃へ

演奏会の終わりには随分気持ちが悪く返っていた。自分が居た時代のこととは振り返ってしか正しく見ることは出来ない。しかし、振り返ってみた時には、もうどうすることもできな

完